

一九九四年夏にみたロンドン・トレド(マドリッド)・ローマ・パリ、エピソード記憶

野村晶子

一昨年から、EC統合(近代国家崩壊)前に、ヨーロッパ都市の現状と、人々の行動を観察しておきたいと、ウィーン、ミュンヘン、ジュネーブ(ベルン)、パリを廻わり、昨年は、「EC中核都市(ベルト地帯)」となるであろうドイツ(ベルリン、フランクフルト、ウィスバーデン、ニュールンベルグ、ミュンヘン)の主要都市を廻っていたが、今年は、経済ベルト地帯からは少し外れる、「ロンドン、トレド(マドリッド)、ローマ、パリ」での印象や、体験を、得たいと思いたち、その旅に出た。

飛ぶコースでパリ・シャルル・ドゴール空港へ到着した。ブリティッシュ、ミッドランド航空に乗り継ぎ、十九時三十分ロンドン空港に到着した(規模の大きな空港であるが、日本のローカル空港のような印象をうけた)。成田をたつてから約十二時間の飛行である。翌八月十日、ロンドン市内を廻っている「貸し室」というのである。かつて、世界に誇る大英帝国の名にはふさわしからぬ光景であった。……やはり不況の波はここ迄達していた。「霧のロンドンの……」学生時代に口ずさんだメロディ通り、昨日迄の東京の蒸し暑さとは異なり、少々膚寒く、ドレスの上に短いレインコートををはおる。同行の息子(高

一)は、シャロックホームズのバブが嬉しいらしく、しきりにカメラ、シャッターを切っている。が、ロンドンには、ネクタイの紳士のように落ちつき、その風格を保っている風情である。アングロサクソンの人達に混って、市民権を得た膚の黒い人達も「我が街ロンドン……」という意気込みで働いている姿に、民族の生活の歴史を感じさせられた。午後、市内を一巡りしたが、大英博物館では、古代エジプト展の中に「女のミイラ」や内臓を入れた数々の壺を同時に展示してあった。感受性の鋭い青年期の真真中にある息子には、大きなショックであったようだ。私自身も、人の命の儚なさを噛みしめていた。午後十九時三十分イベリア航空でマドリッドに着く。翌、八月十一日朝は、中世の都市トレドへ向う。

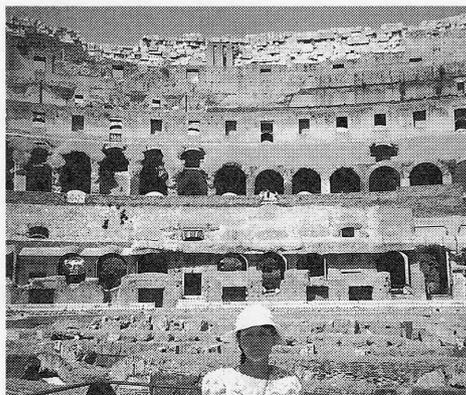
早朝から、さんさんたる陽光である。イスラムの文化の世界であり、街路樹はオリブ、なつめやしの木である。時を経るに従って、光は強さを増した。ほとんど熱射に近い白熱という形容が適当であろう。乾燥地帯（周辺に煙にはひまわりの種が収穫を待ち、広がる風景は茶色一色で、所々に、低いオリブの木、薄緑が点在している。）……かつて、ドンキホーテの通ったという辺りの高速道路を、バスは砂煙を上げて一途に走る。一キロも離れた小屋からつれて来るといふ羊の放牧もあった。古都トレドは、古代からイスラム教、ユダヤ教（ユダヤの赤い星）、カトリック（ハプスブルグ家の紋章の双頭のワシ）の地区が、それぞれの門壁に、紋章を張りつけてある。現代にあつても、民族の生活域が、区別されているのは生活の知恵であらうか。民族、宗教、文化の興亡の産物としてのモザイクの姿でもある。私はユダヤ地区のマーケットをのぞいてみたくなつた。イチジク、トマト、いわし（魚）等、日本でもよく見かける下町の光景がみられた。物価は高くはない。カテドラル大寺院付近では、路地裏に、金糸で細工する刃のつばの工房があり、アラブ系の職人が作業を続けていた。城門を出てすぐ

の所の、ベネチアン・ガラスの工房では、観光目当ての面白い場所もある。中年以上の人や、老人のみが目立つ街は、静かに息をつめているたたずまいである。（若者達は一キロばかり離れた新興都市街での生活で、高層住宅に住んでおり、トレドからも視界に入る）トレドから首都マドリッドへの移動の途中、闘牛場の近くを通る。（私には映画「血と砂」の印象が強すぎて、実物はあまりにも貧弱で、意外に感じられた。休館のシーズンでもあつたからであらう。）午後、マドリッド市内の王宮、スペイン広場、ブラド美術館（ゴヤ館、ペラスケ館）を廻る。土佐の米澤サンゴ店の息子さんが夫であるというスペイン婦人マリアさんは、義母から贈られたという血サンゴのブローチ（忘れ勿草）を胸に、たどたどしい日本語で、しきりに「イサペラ女王様が……」とガイドして下さる。小柄で、いたいたしい体格であつた。夕食後、私は、フラメンコショウに息子をさそつたが、「ホテルで休む」と一人残つてしまった。ショウは中年の体格の女性が踊るものと期待していたが、快い裏切りであつた。舞台には、少女の域を脱したばかりの乙女四人が登つていた。その中の一人が、ジブシーとのことで、美しいが

細面の、青白い無表情な娘であつた。他の三人は、小麦色の膚で、顔立ちも華やかである。スペイン国立舞踏学校で訓練されたものである。フラメンコは、村祭りのな、（オリエンツ風の）メロディーである。娘たちは、汗を流し、ダイナミックに胴体で踊る。（日本で耳にした名曲とは異なり、土の匂いがする。）八月十二日九時三十分発アリタリア航空で発ち、ローマへは十一時五十分に着した。昼食後、コロッセオ、トレビの泉、スペイン広場、フォロ・ロマーノ等を観て廻る。白熱の、そして熱射のローマへの第一歩であつた。「ローマは一日にして成らず」、「すべの道はローマに通ず」の格言通り、古代ローマの、石材の建造物の遺跡を前にして、私と息子は、言葉を失つてしまった。シーザーの宮殿、アフロディテの宮殿、ネロの墓、古代の上、下水道の遺跡、そしてテレベ河一帯の、医療にたずさわつたという中洲ティベリーナ島の遺跡の数々……（現代も医療機関が使っている。）これらは、幾多の戦いに敗れた、奴隷の血と、涙と、命を飲み込んでしまつている。学生時代に興味を持ったドーリア式、イオニア式、コリント式の石柱の数々が眼前にあつた。限らない。古代の石だたみも、

黒光りしてそのまま、二十世紀の今日、なお人々が踏みしめている。そしてゴート族の侵入時も数々の戦火に会い民族の殺戮、破壊は続き、当時、ローマ市民の生存者は五百五十名であったと記録されている。思春期のただ中にある息子の感受性には、大変な刺激であったにちがいない。そして、バチカン国の、聖ピエトロ寺院に着く。キリストの弟子ベトロの墓の上に建立したのがピエトロ寺院で、城門を少し行くと、古代エジプトのオベリスクが、高くそびえ、何百というコリント様式の大理石の柱は、ある角度から見ると、一本に見えるという地点も、あるという説明であった。そして、聖ピエトロ寺院本殿に向う、ゆるやかで、幅広い階段は数は少ないが、広さを誇っている。寺院の入り口では、スイスの、中世の民族服に身を包んだ、衛兵が待機していた。寺院の中は、ローマ貴族の、祈を捧げる室が多数あり、この日も「ミサ」が行われていた。その入り口では検問があり、私と息子は、中に入れてもらおうとすると、口早なイタリア語に見まわってしまった。（全くイタリア語は解らない）「ウイ、ウイ」と答え、難なく、ミサに参加できた。荘厳なミサであった。そして、入り口のミケランジ

エロ作のピエタ像に、しばらく見いった。そして、数々の宝物……（法王の法衣の、金糸とサンゴの輝くばかりの縫い取りは、修道尼の作品という……信仰の証しであろう）。寺院を出て、ようやく、ホテルについて、一息……と思った時、（フロントでキイを受け取っている）「息子さんが……」という声。彼は、一メートル四方に嘔吐していた。スペイン、そして、ローマの、乾燥と、熱射にやられたのだ。持たせてあった大判の木綿のハンカチーフは、あきらめるより仕方なかった。ホテルの床敷物も汚してしまった。部屋に着くなり、激しい嘔吐が、二、三度続く。脱水症状になっては困ると思い、水（エビアン）も含ませたが、受けつけない。体温は三十九度三分である。添乗員に医師を頼み、救急車を呼んでもらおうとした（点滴で補給したいと考えた）。しばらく経って、イタリア人の、三十歳の医師が、部屋にやって来たが、イタリア語は全く解らない。彼に、「息子は風邪気味で、疲労と日射病ではないか」と伝えても「そんなはずはない」と英語で答え、「メレナ」か、「肝炎ではないのか？ 皮膚が黄色くなっている」という。（一刻も早く救急車で病院に運んでもらい、リンゲルの点滴



コロッセオで筆者（白熱のローマ）



トレド、アラブ地区

をしてもらいたいの、イタリアでは、日本とは国事情が異なり、家庭医が診断、治療を任され、勿論、投薬はしないと分り、何とかこの嘔吐を止めなかった。医師は、嘔吐止めの注射を腰に打ち、3万円の往診料で帰って行った。日本からの添乗員は、カンツォーネの夕食に出掛けた後の出来事である。医師は、「自分の帰った後で、三度嘔吐したら呼ぶように」と、言い残していた。やはり解熱せず、激しい嘔吐は続く。夜半に、添乗員がホテルに戻ったので、さっそく、息子の症状を告げ、医師に来てもらうよう頼んだ。……医師は、「日本の患者は初めてであった」そう、再び、問診、検査をし、吐き気止めの注射をして、「明日は、ドラッグストアで、指示した七種類（一日三回の投薬である）の薬（約五千元）を買って来るよう言い残し、再び、往診料3万円を要求して、ホテルを去った。翌八月十三日は、ナポリ・ボンベイ観光の、スケジュールであったが、添乗員は、母子二人の為に、残って下さり、ドラッグストアに、薬を買いに出掛けて下さった。夜、ナポリから帰った、尼崎市の、N氏御妻から、果物の贈物があり、感激した。翌八月十四日、一行は、スイスに飛び、日本人は私

ち母子二人だけの、ローマの休日となる。（看病に明け暮れた二日間であった）イタリアのガイド（旅行会社社長）、アガチ氏の好意で、「ホテル・プリンセス」に移り、過すことになった。小ぢんまりしたホテルの部屋は、分厚い、カーテンが閉められ、熱射をさけることが出来た。卓上の電話のベルで出てみると「野村さん……」後はイタリア語である。とっさに、「ノン、イタリアーノ」と答えてしまった。すると、（本学英文科のA先生のお声の響きに似ていた。）「息子さん、何如ですか？ 食べ物は、オリーブ油は駄目です。ホワイト・リゾットにして下さい。果物は与えてもいいですよ。」自分の耳を疑ってしまった。町重な指示の、日本語である。「今、私はこのホテルのA号室に居ます。何かあったら知らせして下さい。」……息子の命は、もう大丈夫だと思った。なんと、アガチ氏の部屋は、私達の部屋から一室おいて、次の室であったことが翌日分った。後で、症状が回復して、イタリアを発つ時、空港まで廻わして下さった弘前出身という、若い女性は、「アガチさんは、早稲田大学英文科に学んだことがおあります。」と語って下さった。イタリア・リラは、今年の円高にもかかわらず、

日本円に、〇・六乗であった。（約二分の一の価値しか認めないことになる）ガイド（イタリア語二名、フランス語一名）料、アリタリア航空往復の搭乗券二人分、ホテル二泊の二人分。（食事は除く）計十四万円の請求書を渡されたが、八月十七日、パリで、無事ツアー一行に合流することが出来た。人々の好意に支えられた南ヨーロッパの旅であった。

（附）

今年のヨーロッパ旅行前、円と、各国の通貨（トラベラーズチェックを含めて）との交換に、東京銀行に行くと、「イタリアリラは手持ちが無い。」とのことで、仕方なく、その分は、現金（米ドルのトラベラーズチェックの方が良かった）で持って行くことにした。イタリア経済は破綻し、日本との二国間協定は無いのが現状で、円との交換はしても、一方的なものである。ラテン民族独特の価値観と、その行動を、垣間見る思いがした。アフリカ、他のアジア諸国に比較すると、民族間の交流の歴史の浅さを痛感した旅でもあった。